

成長見守る

レポート 3
交流
あれこれ

放課後子ども教室 堀金わいわいランド

放 課後は子どもたちにとって、いろいろな仲間と出合い、さまざまな体験ができる貴重な時間。しかし近年は、不審者情報など安全上の問題もあり、家で過ごさざるを得ない事情もあるようです。

今年5月から市内全地域に発足した放課後子ども教室「わいわいランド」は、すべての児童を対象に、安全管理員と呼ばれるボランティアに見守られながら、下校時間の早い日の放課後、体育館などを利用して、さまざまな遊びや交流を行っています。

午後2時半、堀金小学校体育館に集まってきた80人ほどの児童たち。ボール遊び、フラフープ、オセロなど、思い思いの遊

びを楽しんでいます。

ドッジボールで遊ぶ斉藤雄騎君（小1・堀金烏川）は「投げたり、キャッチしたり。上級生はかっこいい」。紙飛行機で遊んでいた大池優奈さん（小1・堀金烏川）は「友だちが道具を譲ってくれた」と笑顔です。

市の教育相談員で、発足時からスタッフとしてかわわつてき

子どもは案外、拘束された世界にいる

た小平信夫さん（76・堀金烏川）は、「子どもは案外、拘束された世界にいます。自分を出せる時間が意外と少ない。だから仲間と自由に遊べる環境が必要」と話します。ここでは、子どもたちの遊びに対して、大人からの口出しを極力しないことを方針としています。

「学校などの組織はルールで人を結びつけていますが、遊びは心や思いやりで人が結びつく。当たり前前に相手の立場を考へることや、自らルールづくりができるようになるのは、子ども時代体験が基本」と小平さん。現在、参加児童は少しずつ増え、アンケート調査では、66%の保護者が「いろいろな物や人に興味を示す」、「テレビを見る時間が減った」など、変化を感じています。

地域と子どもをつなぐ新しい取り組みが、さらに深まりを見せています。（取材・11月19日）



豊科アルプス区・見守り活動

午

後3時の豊科東小学校。大きなランドセルを背負ったアルプス区の子どもたちが玄関口で並んでいます。帰宅の道のりを付き添うのは、区のおじいちゃん、おばあちゃんたちが入学して間もない子どもたちが安全に帰宅できるよう、1・5キロほどの帰路とともに歩いています。年間191日。入学式など特別な行事の日を除き、雨

雨にも風にも負けず、191日。

の日も風の日も毎行行われています。

この見守り活動が始まったのは今から3年前。児童を狙った事件が全国的な話題となる中、地域内でウォーキングを行っていたお年寄りたちと有志が、活動を立ち上げました。

「子どもたちの防犯にも一役買い、自分たちの健康のためにもなる。一挙両得」と話す寺島進さん（84・豊科高家）は、活動の開始時からメンバー。こ

の日は1年生と一緒におしゃべりを交えながら、ゆっくりと帰り道を歩きました。付き添うのは低学年の児童が中心で、帽子が風で田んぼに飛ばされてしまいう子や、途中でおしっこをしたくなる子など、まだあどけない部分も多いようです。それでも、たくさんの子どもと顔見知りになることは喜びも多く、地域とのつながりも増したそうです。

メンバーの一人、上小路仁志さん（67・豊科高家）は、区の納涼祭で、一緒に帰っていた子どもから声をかけられたそうです。「両親とも話をして、会話が広がりました。地域に浸透していると実感しました」と話します。

「おかえり」。

「ただいまーっ」。

（取材・11月20日）



一緒に帰る地区の子どもたちが揃うまで、ランドセルを置き、校内で遊んで待ちます。



「自分の健康のためにもなるから」とさりげない寺島さん。

各小学校単位で設けられているわいわいランドではスタッフを随時募集しています。詳しくは社会教育課子ども支援係（TEL 62・4565 内 62・3525）まで

